

助産学専攻科における早期体験実習の評価 －助産所実習における学生の学びの分析－

西出弘美¹⁾，長岡由紀子¹⁾，島田智織¹⁾

¹⁾ 茨城県立医療大学助産学専攻科

要旨

【目的】助産所実習における学生の経験からの学びを明らかにし，早期体験実習としての効果を検討する。

【方法】同意を得られた学生8名の実習記録より，実習で経験したことから「学んだ」，「気づいた」，「感じた」と記述している文章を抽出してコード化し，帰納的に結果を導いた。

【結果】助産所実習で経験できた内容は，妊婦健康診査・母乳外来・産後ケア・出産への立ち合い，新生児訪問・乳児健診への同行，各施設が実施しているクラスへの参加等であった。経験からの学びは，【対象者の理解】【助産師に必要な技能】【助産師の姿勢】【助産師の役割】【助産所の役割】の5つのカテゴリーで示され，実習の目標に沿った学びが明らかになった。また，実習後は目標とする助産師像が描け，それに向けての自己の課題も明確になった。

【結論】早期体験実習としての助産所での学びは，本格的な学習の導入として効果的であった。

キーワード：早期体験実習，助産所実習，開業助産師，経験

I. はじめに

我が国の出生数は2016年に遂に100万人を下回り¹⁾，少子化の一途を辿っている。そして，出生数の約99%は病院や診療所といった病産院での出産であるが，約0.8%は助産所あるいは自宅での出産となっている²⁾。

助産所とは，助産師が助産を行う場所，または妊婦・褥婦，もしくは新生児の保健指導を行う場所として医療法第2条で定められている施設の事であり，管理の責任は助産師が担うものである。

日本では，昔から母子の一貫した継続ケアを担い，母子や家族を地域で支援してきたのは開業助産師であり，助産所こそ地域の母子保健・女性の健康支援において重要な場所であると言われている³⁾。

日本助産師会によると，2018年現在，全国に741か所の助産所があると公表されているが⁴⁾，分娩を取り扱っている施設はその約30%止まりである。しかし，助産師は，いわゆる「助産」だけではなく，母乳育児や子育ての相談，いのちの教育，思春期から更年期までの女性のライフサイクルに合わせた健康支援など，全ての女性とその家族に常に寄り添ったケアを提供している。最近では，「妊娠・出産包括支援事業⁵⁾」の産後ケアの施設として，あるいはコミュニティ作りの場所として，時代のニーズに応じた柔軟な活動をしている。

本学では，本格的な助産学実習前の導入として，助産学専攻科入学後間もなく「早期体験実習」の位置づけとして助産所での実習を実施している。この実習では，熟達した開業助産師による様々な助産活

動に参加して、助産実践の基礎を学ぶと同時に、助産師としてのアイデンティティの獲得の一步を踏み出すことを目的としている。その上で、自己が目指す将来の助産師像を描き、今後に向けた自己の課題を見出す事がその後の学習の導入につながると考えている。そこで、早期体験実習での学びが、どのような効果を示しているか検討するため調査を実施したので報告する。

II. 目的

助産所実習における学生の経験からの学びを明らかにし、早期体験実習としての効果を検討する。

III. 助産所実習の概要

1. 助産学専攻科の年間カリキュラムと助産所実習の位置づけ

専攻科の年間カリキュラムは図1に示す通りである。助産所実習は、本格的な助産学実習（妊婦期のケア、分娩介助、ハイリスク妊産婦・新生児のケア、助産マネジメント）への導入として、専攻科入学後約3週間後に実施している。

2. 助産所実習の目標

実習の目標は以下の通りである。

- 1) 助産所の概要について理解できる。
- 2) 開業助産師の母子や家族に対する姿勢や援助の在り方を理解できる。

- 3) 参加した助産活動から、助産師のケア内容や役割を理解できる。
- 4) 地域における開業助産師の位置づけ、役割、多職種連携を理解できる。
- 5) 今後の実習に向けての各自の基盤づくりができる。
- 6) 目標とする助産師像を明確に描くことができる。

3. 助産所実習の方法

県内外の5か所で実施し、各施設に学生1～2名を配置し、3日間の実習を行った。実習期間内は、助産師の指導のもと助産ケアに参加し、分娩があれば立ち会いをし、助産所の掃除や洗濯、食事準備なども助産師と一緒にいった。県外の施設は宿泊を伴う実習とし、夜間も状況に応じてケアに参加した。実習施設の詳細は表1の通りである。

実習前のオリエンテーションでは、各施設の特徴及び展開している事業について説明をした。特に助産所で出産を希望する女性は、病産院にないものを求め、自身のバースプランや育児スタイルを確立している方が多いなど、対象の特性についても説明を加えた。

さらに、助産所では病産院とは異なるケアも取り入れているが、そのケアの目的や意義、エビデンスについても十分に考察するよう伝えた。

IV. 研究方法

1. 対象者

助産学専攻科の「助産所実習」を履修した8名の学生のうち、調査協力の得られた者。

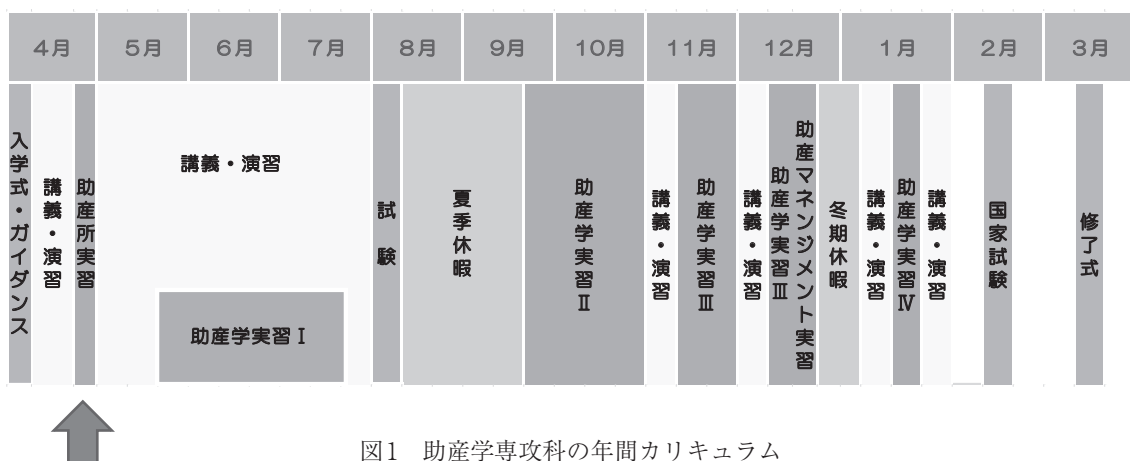


図1 助産学専攻科の年間カリキュラム

表1 実習施設（助産所）の紹介

実習施設	学生数 (人)	臨床教育講師 (人)	主な事業 (妊婦・褥婦・新生児健診以外)
A(県内)	2	1	新生児訪問、卒乳・断乳講座、いのちの教育
B(県内)	1	1	産後入院、ベビーマッサージ教室
C(県外)	1	9	産前産後のクラス、パパランチ、母と子のヨガ
D(県外)	2	1	冷え対策と安全ツボクラス、整体クラス、バー スクラス、ストレッチ講座
E(県外)	2	2	マタニティウォーク、産前産後のクラス、イト オテルミー(温熱療法)

2. 調査方法

1) 協力依頼方法

助産所実習開始前のオリエンテーション時に、学生に対し調査担当教員より調査概要について説明し、実習記録が研究のデータとなることを文章および口頭により説明した。実習記録は、実習の成果をまとめるものであり、調査協力の可否に関わらず提出が義務付けされている。そのため、実習記録の一部が調査目的で利用することに関して同意書を作成し署名をもって同意を得ることとした。

2) データ収集方法

調査対象とした実習記録は以下の通りである。

- ①行動記録
- ②出会った産婦の記録
- ③出会った対象の記録
- ④参加したクラスの記録
- ⑤目標とする助産師像と自己の課題

3) 調査期間

2017年4月～5月

4) 分析方法

実習記録から、助産所で経験した事や助産師の活動から「学んだ」「気づいた」「感じた」と記述している文章を抽出し、関係性に沿って分類し抽象度を上げてカテゴリー化し帰納的に結果を導いた。実習終了時に記入した「目標とする助産師像」と「自己への課題」からの共通項目を抽出した。分析結果は研究者間で合意に達するまで協議した。

5) 倫理的配慮

調査対象者には、調査の目的と方法、内容、プライバシーと匿名性の秘匿、調査への協力は自由意思

であること、途中辞退の自由、調査への協力の有無による成績等への影響は全くないこと保証することを説明した。実習記録提出時に、調査の目的を再度口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得たものとした。調査内容の抽出にあたっては、提出された実習記録の個人情報伏せて研究者がコピーし、調査項目に沿って内容を抽出した。

本研究は茨城県立医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号757）。

V. 結果

1. 協力者の背景及び経験内容

1) 研究協力者

協力の得られた学生は8名。うち1名は産科ユニットでの臨床経験があり、残り7名は看護師基礎教育課程修了後の入学で、臨床経験はなし。また、8名中4名は専攻科入学前に助産所での実習経験（1日）があった。

2) 経験内容

妊婦健康診査（計測・触診・超音波検査・温熱療法）：5名*

母乳外来（乳房マッサージ・乳汁分泌促進のためのお灸・授乳指導・卒乳ケア）：8名*

産後ケア（デイケア）：2名

出産立会い：1名

助産所外での活動（新生児訪問への同行・赤ちゃん教室・3か月健診[保健センターでの事業]）：3名*

クラス（ストレッチ講座・マタニティウォーキング・ヨガ・ベビーマッサージ・ピラティス・卒乳ク

ラス)への参加:8名*

*一人の学生が複数回経験あり

2. 経験を通じての学び

提出された実習記録から、「学んだ」「感じた」「気づいた」と記してある文章を抽出した結果58個のコードになった。これらを意味の類似性によって分

析し、13個のサブカテゴリー、5個のカテゴリーが認められた(表2)。以下、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは<>、コードは「 」で表記する。

1)【対象者の理解】

【対象者の理解】は、<対象者の不安や悩み>、<対象者の個別性>、<出産の準備>の3つのサブカテゴリーから構成されている。「入院期間中に解

表2 助産所実習での経験からの学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード		
対象者の理解	対象者の不安や悩み	入院期間中に解決できないことが一杯あることが分かった		
		多くの母親が卒乳や断乳に悩んでいるのが分かった		
		母親は、赤ちゃんの事を考えて様々なことに不安を感じていることを実感した		
	対象者の個別性	育児に対する価値観も違う 同じような状況でも表出される不安の程度など個人差がある		
	出産の準備	助産所で出産するためには、基本的な体づくりが大切		
助産師に必要な技能	専門的な知識・技術	態度だけでなく技術の確かさも重要 素早く正確な計測・触診の手技(力の入れ具合)も大切 対象者の質問に臨機応変に対応するには沢山の知識と経験が求められると思った 迅速な対応力、知識、技術が必要不可欠である 予測されるような症状や不安に働きかけることが大切		
		専門的なアドバイス	限られた時間で優先させる支援をアセスメントする力が必要 助産師だからできる専門的なアドバイスが母親にとって支えになる 身体づくりだけでなく、不安や悩みといった心理的な支援も大切 乳児の健康状態を確認してアドバイスを行う 助産師はお産だけでなく、出産のための体づくりからしっかり伝える	
			対象に合わせたケア	個々に応じたケアができています その人の生活に合った様々な技術を提案することが大切 母親の経済性も考慮し情報提供する
				対象と共に考える姿勢
	対象者への配慮	信頼関係を築くことが大切 母親が、より快適に満足のいく育児ができるよう望みを聞きながら対応すること 指導する側は、母親の気持ちを考えて声かけの工夫をすることが大切 褥婦さんや家族と明るく笑顔で接することで、褥婦さんも心を開きやすい 対象者との距離感に配慮して行動する 助産師の優しい声かけや表情が産婦にとって質問しやすい雰囲気をつくる 話を聞く事等は基本的なことであり、相手との信頼関係を築く上で大切 母親に安心感を与えられる話し方 母親を感じる様々な不安を受け止め、安心してもらえるような言葉かけが必要		
		対象者に寄り添う	近くで育児をサポートしてくれ、母親にとっても安心感を与えることができる ケアに伴う痛みに対しても寄り添うことが大切 対象の悩みや思いに寄り添うことの大切さ 根底にある不安や悩みに寄り添う姿勢が大切 痛みに寄り添っている 産婦さんだけでなく皆と一緒に産するという感じ お産の際にそばに居ることの大切さを実感した 頑張りをおねがい、新しい生命の誕生を共に喜ぶといった姿勢が大切 コミュニケーションを多くとり、寄り添い受容する態度で接することから信頼関係を作る	

表2 助産所実習での経験からの学び（続き）

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
助産師の役割	対象者の頑張りを認める	母親自身の育児に対する自己肯定感を高めることができるような関係作りが大切
		母親が頑張っていることを理解し、親自身が自分の変化や努力に気づき自信を持てる関わりをすることが大切
		母親ができていないことを認め、それをしっかり伝えることで母親の不安軽減につながる
	自立への支援	相手の価値観と合わず、心に響かなければ相手の行動変容にはつながらない
		お母さん達が自身の育児について振り返る時間を作り、話を傾聴する事で自己解決に繋げること
		セルフケアの大切さ、生活のポイントを伝えることが重要
		寄り添うだけでなく、時には背中を強く押していくことも必要
助産所の役割	助産所の地域での役割	子育て世代以外にも、助産所が地域にとって開かれた場所であることが必要
		安心して家に帰ってもらえるような、地域の母子ケアの面でも重要な役割を果たしている
		地域医療機関との連携を取りながら、母子の安全が守られている
	助産所でのクラスの効果	クラスに参加することで、母親同志の強い繋がりができ、さらには母親のネットワークが広がる
		地域のクラスに助産師が加わることで地域支援にもつながる
		妊婦同士交流の場になっている

決できないことが一杯あることが分かった」や「多くの母親が卒乳や断乳に悩んでいるのが分かった」など、学生は、助産所で出会った妊産褥婦との会話から＜対象者の不安や悩み＞を知り、「同じような状況でも表出される不安の程度など個人差がある」など、同様の事でも＜対象者の個性＞があることを再認識していた。また、マタニティウォーキングに参加した学生からは、「助産所で出産するためには、基本的な体づくりが大切」と助産所での＜出産の準備＞について、新たな発見を語っていた。

2) 【助産師に必要な技能】

【助産師に必要な技能】のカテゴリーは、＜専門的な知識・技術＞、＜専門的なアドバイス＞、＜対象者に合わせたケア＞の3つのサブカテゴリーから構成されている。母乳外来や妊婦健康診査への参加からは、「態度だけでなく技術の確かさも重要」、「迅速な対応力、知識、技術が必要不可欠である」など、熟練した助産師の診察の様子から＜専門的な知識・技術＞の必要性を感じていた。また、新生児訪問等や産後ケアへの参加からは、「助産師だからできる専門的なアドバイスが母親にとって支えになる」、「乳児の健康状態を確認してアドバイスを行う」など、＜専門的なアドバイス＞の効果を確認していた。さらに、対象者の生活や経済性までも考えた「個々に応じたケアができていない」ことなど、出産や育児が生活の中で営まれていることを再認識していた。

3) 【助産師の姿勢】

【助産師の姿勢】は、＜対象者と共に考える姿勢＞、＜対象者への配慮＞、＜対象者に寄り添う＞の3つのカテゴリーから構成されている。妊婦健康診査や母乳外来、産後ケアに立ち会うことで、助産師は常に「一緒に考え対応する」、「一緒に解決方法を考える」など、＜対象者と共に考える＞姿勢で対応していることを実感していた。また、対象者とのかわりから、「信頼関係を築くことが大切」、「母親に安心感を与えられる話し方」など、＜対象者への配慮＞に気付かされていた。さらに、助産所で開催されたクラスに参加して、「対象者の悩みや思いに寄り添うことの大切さ」や分娩に立ち会った学生からは「痛みに寄り添っている」など、＜対象者に寄り添う＞ことを実際の活動から学んでいた。

4) 【助産師の役割】

【助産師の役割】は、＜母親の頑張りを認める＞、＜自立への支援＞の2つのサブカテゴリーから構成されている。まずは、「自身の育児に対する自己肯定感を高めることができるような関係作りが大切」や「母親が頑張っていることを理解する」など、＜対象者の頑張りを認める＞ことで、対象者を肯定的に受け入れることの大切さを学んでいた。その上で、「心に響かなければ相手の行動変容にはつながらない」、「自分で対処行動がとれるように支援すること」など、寄り添うことを基本としながら、＜自立への支援＞を促していることに自ら気付いていた。

5) 【助産所の役割】

【助産所の役割】は、＜助産所の地域での役割＞＜助産所でのクラスの効果＞の2つのサブカテゴリで構成されている。助産所を利用したクラスに地域住民が参加する様子から、「子育て世代以外にも、助産所が地域にとって開かれた場所であることが必要」といった、本来の助産所の役割に加え＜助産所の地域での役割＞を見出していた。また、助産所の各クラスの参加者の様子から「妊婦同士の交流の場になっている」、「クラスに参加することで、母親同志の強い繋がりができ、さらには母親のネットワークが広がる」など、＜助産所のクラスの効果＞について考察していた。

2. 早期体験実習後の「目標とする助産師像」について

実習を終えた時点での「目標とする助産師像」について、今後学習を進める上でも支えとなるよう記載してもらった結果を表3に示した。

多くの学生が、「信頼される助産師」「安心感を与える」「優しい」「笑顔」「共に歩む・成長する」「寄り添う」「適切なケアができる」などがキーワードとして記されていた。

表3 早期体験実習後に描いた「目標とする助産師像」

- ・責任を持ち笑顔でサポートできる助産師
- ・常に初心を忘れず勉強をする姿勢を持つ
- ・いいお産とは何かを常に考え追究していく
- ・対象に優しくそっと手を差しのべられる助産師
- ・対象者や家族から信頼される助産師
- ・対象者と共に成長していける助産師
- ・安心感を与え、身近に感じてもらえる助産師
- ・傍に寄り添いながら共に歩んでいける助産師
- ・高度の知識や技術を持ちえた助産師

3. 目標とする助産師像に向けての「自己の課題」

「目標とする助産師像」に近づけるための自己の課題について記載してもらった結果を表4に示した。学生全員が「知識・技術の獲得」を上げ、対象を受け入れる柔軟な姿勢や、自己の成長、などといった自分自身を磨く事等があげられていた。

表4 目標とする助産師像に向けての「自己の課題」

- | |
|---|
| 知識・技術の習得
人間性を磨き、自己を成長させる事
固定観念を持たず、すべて受け入れる姿勢を持つ努力をする
自分を大切にし、人にも優しくする |
|---|

VI 考察

1. 助産所での経験内容について

実習期間中、学生は助産所で実施されている全ての事に参加することができた。経験内容は、主に妊婦・褥婦・新生児の健診や母子のケアであり、助産師が1人の女性にじっくり関わる様子や熟練したケア技術を見学することができた。

助産所では産科領域における補完代替医療としての東洋医学的な療法⁷⁾やアロマセラピーを導入している。実際には、お灸や温熱療法の施術に立ち会い、施術の効果や対象者の反応など直に確認することができ、助産所ならではの女性の健康支援方法を体験することもできた。

開業助産師は主に市町村からの訪問事業も委託されており、今回の実習では新生児訪問や乳児健診へも同行した。病院における実習では、退院後の母子に触れる機会は非常に少ないが、このように母子が生活する場に赴き、育児の様子や児の成長発達を知ることが、出産後の家庭での生活をイメージするための貴重な経験となった。

今回の実習では、学生1名のみ、助産所でのフリースタイルの出産に立ち会うことができた。3日間の実習で出産に立ち会えることは珍しいが、ここでも産婦を支援するケアと卓越した分娩介助技術に触れ貴重な経験を重ねることができた。

このように限られた期間ではあったが、今後の助産活動の実践に活かせる多くの事を経験することができた。しかし、実習施設により学生の経験に違いが生じたことは避けられない。その点に関しては、実習終了後の報告会で個々の経験と学びを共有した。

報告会では、『助産所でのケアは、病院ではできない』といった趣旨の発表があった。確かに、病産院では実施していないケアもある。しかし、そのケアの根本的な考え方は、全ての女性や家族にとって自らが持っている力を引き出すという事である。助

産師の役割とも関連するが、施設の違いによって助産師の役割が異なるのではなく、置かれたところでどれだけ女性やその家族に寄り添ったケアができるかが必要になってくることを、実習終了後のカンファレンスで確認した。

2. 助産所実習の効果について

学生は助産所において、妊産褥婦と新生児、育児中の母親とその家族、そして助産所を支える地域の女性に出会う機会を得た。そこでの学びと効果について、実習目標と照らし合わせながら考察する。

1) 開業助産師の母子や家族に対する姿勢や援助の在り方について

この目標については、【対象者の理解】、【助産師に必要な技能】、【助産師の姿勢】の категорияが相当する。

本実習は、助産師基礎教育が本格的に始まる前の実習であり、特に妊産褥婦・新生児に関する専門的な知識やケア技術の多くは看護基礎教育までのレディネスである。そのため、助産所で出会った妊産褥婦と少しでも時間を共有することで、対象の理解が深まったと思われる。学生は、主に妊婦健診や新生児訪問、母乳外来へのかかわりから、助産師には「**＜専門的な知識・技術＞**」が必要であり、それを「**＜対象に合わせたケア＞**」に繋げていくという【助産師に必要な技能】を学んでいた。助産師は、どのような対象を目の前にしても、瞬間的に助産診断をして必要なケアを実施するといった助産過程を展開している。学生は、知識も技術も未熟であるため、熟練した助産師の技は神業のように見えたのではないだろうか。ベテラン助産師のケアの在り方を“みて”“感じて”“一部参加して”学ぶ効果は大きく⁷⁾、専門職として必要な知識や技術の重要性を再認識したと思われる。

【助産師の姿勢】は、対象者の悩みや不安に対応する姿から、対象を尊重し協働者としての働きをしていることを学んでいた。対象者の相談事に、まずは傾聴、共感し、その人の持っている力を最大限に引き出そうとするヘルスプロモーションの考え方³⁾に気づけたことは、とても重要な事である。そして、対象と接する態度としては、話し方、距離感、笑顔、安心感を与えるなどの助産師としての立ち振る舞いについても、有るべき姿を学んでいた。また、助産

師として「**＜対象者に寄り添う＞**姿勢」というのは、隠れている問題の解決にも繋がるきめ細かなケアであり、同様の研究⁸⁾からも学生の学びとしてあげられている。しかし、実際に『寄り添う』ということがどのようなことであるのかについては、本格的な実習が始まってから、ケアを通して学ぶことが多いのではないかと考える。その時に、助産所での経験が活かされることを期待したい。

2) 参加した助産活動から、助産師のケア内容や役割を理解できる

この目標については、【助産師の役割】の категорияが相当する。

【助産師の役割】は、「母親が頑張っている事を理解し、自信を持てるかかわりが大切」や「母親ができていないことを認め、それをしっかり伝える」など「**＜対象者の頑張りを認める＞**」ことが大切であることを学んでいた。「**＜頑張りを認めること＞**」や「**＜自立への支援＞**」に導かれたコードは、主に母乳外来や新生児訪問や3か月健診への参加の記録からであった。母乳を与えることも含め慣れない育児、日々新しいことに直面し、不安も募る母親にアドバイスを与えられるのは、母子保健の専門家である助産師の役割である。母親役割の獲得には、母親と対等な関係となり、タイムリーに母親に承認・賞賛することにより母親としての自信を高める⁹⁾とあるように、対象者をエンパワーすることが女性の自立支援へ繋がる。

今回の実習では、病院へ入院している母親ではなく、日常生活の中の母親と接しているため、幅広い視野で助産師の役割が理解できたと思われる。

3) 地域における開業助産師の位置づけ、役割、職種連携について

この目標については、【助産所の役割】の categoriaが相当する。

開業助産師が地域でどのような役割を担っているかは、「安心して家に帰ってもらえるような、地域の母子ケアの面でも重要な役割を果たしている」や「医療機関と連携を取りながら母子の安全が守られている」など、対象にとって助産所が身近な存在であることを実感していた。また、助産所開設には必ず嘱託医や嘱託医療機関が必要¹⁰⁾であり、助産所で出産する場合でも連携する産婦人科医から確認を得ながら進めている¹¹⁾。さらに、妊娠・出産包括支

援事業の産後ケア導入により、市町村からの委託や近隣の医療施設からの依頼など、多機関・多職種との連携が必要になっている。1人の助産師にできることは限られており、各専門職種と連携をすることが、母子の安全を確保し、ニーズに沿った支援ができると思われる。

助産所でのクラスは、一般的に妊婦や子育て世代を対象にしているものが多いが、中には地域の方が参加しているクラスもあった。そこに参加した学生は、「子育て以外の世代にも助産所が地域にとって開かれた場所であることが必要」と感じていた。助産所が拠点になり、母親同士のネットワークだけでなく地域のネットワークを広める二次的な働きがあることは大変理想的であり、助産所の果たしている役割は大きい。今回の実習で、助産所が女性とその家族、そして地域の方の健康も支援していることを学び、将来は学生もこの連携者の1人として役割を担うことを認識できたと考える。

3. 助産所実習の位置づけと今後の課題

本専攻科で、入学後間もなくの時期に助産所実習を取り入れた理由として、助産師が何をする職業なのか実際の助産活動から学んでほしいという事があった。そのため、出産だけではなく、全ての女性とその家族を継続して支援し、地域に根差して活動する開業助産師の姿に触れることは、助産活動の幅広さを認識してもらえるものと考えた。また、理想の助産師モデルに出会わないと助産師を将来の職業としない¹²⁾とも言われているように、理想の助産師に出会えることは、助産師になるモチベーションを上げて、本格的な学習や実習を乗り切れるのではないかと考えた。

助産所実習終了後に記載してもらった「自己が目標とする助産師像」では、「信頼される助産師」「安心感を与える」「優しい」「笑顔」「共に歩む・成長する」「寄り添う」「適切なケアができる」などがキーワードとしてあがっていた。助産師は、助産師である前にひとりの人間である。そのような意味で、まずは対象に対して人としてのあるべき姿を考え、それをベースに専門職として自分の理想を含めた助産像を描いていた。これらは、学生自らの言葉で表現されているため、『初心忘るべからず』として心に刻まれるに違いない。

そして、学生はこの実習で助産師の役割と責任の重さを学び、助産師としてのアイデンティティ獲得の一步を踏み出すことができていた。実習開始時には、学生は十分な知識や技術を持ち得ていない不安があったかもしれないが、終了時には、様々なことが体験でき楽しく充実していたという感想を述べていた。助産師の職業的アイデンティティに関連する要因を検討した研究では、助産師学生時代の肯定的な体験も影響しているという報告もある¹³⁾。この事から、助産所での早期体験実習は助産師になってからも専門職のアイデンティティを高く保持できる要因にもなると思われる。

さらに、自己が目標とする助産師像に近づくための課題については、全員が知識・技術の習得をあげていた。これは、実際の助産活動に触れ、専門職の責任の重さを実感したため、今後の学習への意気込みとも考えられる。それに加え、「人間性を磨き、自分を成長させる」など、対象から信頼を得るためには、人としての成長も必要であることに気づけていた。学生は、経験豊富な開業助産師の温かさや柔軟性に触れて、自分に何が足りないかを感じ内面を磨く事にも思い至っていた。また、女性や家族の健康支援者になる為には、自身の健康を管理することが大切であり、食事や運動、睡眠などの生活スタイルなどから自己を振り返っていた。

市村¹⁴⁾は、新たな能力や意味が生み出される過程を「経験」と言っている。この意味で「経験」とは学習の事であり、経験することで様々な矛盾や葛藤を乗り越え、以前の自己より高次の自己へと発達するとも続けている。つまり、助産所での経験はこれからの学習の土台となり、本格的な学習や実習に向けて効果的に働いたと考える。ここでの学びをさらに強固にするには、関連科目への具体的な結びつきなど、教員のサポートも不可欠である。また、学生自身でも助産所実習での経験を振り返りつつ、学びを積み重ねられるような「セルフアセスメントシート」などの作成が課題であると考えた。

Ⅶ. まとめ

助産学専攻科の助産所における早期体験実習では、開業助産師の基本的な活動を経験することがで

きた。そして、学生はその経験を通して、実習の目標である【対象者の理解】【助産師に必要な技能】【助産師の姿勢】【助産師の役割】【助産所の役割】を学んでいた。

実習後には、目標とする助産師像が描かれ、それに向けての自己の課題も明確にできた。そのため、早期体験実習は、本格的な助産学専攻科の学習に向けて動機づけとなったが、この後に始まる学習への丁寧な関連付けが重要になってくることが課題となった。

謝辞

本調査にご協力頂いた学生の皆さんに深く感謝申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省. 人口動態総覧の年次推移
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakuteil6/dl/04_h2-1.pdf (参照2018/09/18)
- 2) 母子保健の主なる統計. 平成28年度刊行. 出生の場所別, 出生割合
- 3) 福島富士子. 現代の助産所に求められている役割 安全で快適なお産の場から地域の母子をつなぐ場へ. 助産雑誌. 2013, 67(2) 98-103
- 4) 日本助産師会. 全国助産所一覧
http://www.midwife.or.jp/general/birthcenter_list.html (参照2018/09/18)
- 5) 厚生労働省. 妊娠出産包括支援事業概要
<https://www.mhlw.go.jp/topics/2015/02/dl/tp0219-13-03p.pdf> (参照2018/09/18)
- 6) 大野聡. 補完代替医療とリスクマネジメント. 助産師. 2010, 64(3), 8-13.
- 7) 毛利多恵子. 達人が育つための条件. 助産雑誌. 2006, 60(12) 1052-1055
- 8) 小野智佐子. マターナルアイデンティティ獲得を支援する開業助産師の援助. 第45回日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション. 2015, 11-14
- 9) 津間文子, 北村万由美, 藤原弘子, 四宮美佐恵. 本学における助産師教育の現状と課題-助産所実習の学びの分析を通して-. 看護・保健科学研究誌. 2013, 13(1) 65-73
- 10) 医療法. 第19条〔助産所の嘱託医師〕
- 11) 助産業務ガイドライン2014. 日本助産師会
- 12) 加納尚美. 専門職を育てるという意味と条件. 助産雑誌. 2006, 60(12) 1033-1041
- 13) 佐藤美春, 菱谷純子. 助産師の職業アイデンティティに関連する要因. 日本助産学会誌, 2011, 25(2) 171-180
- 14) 市村尚久, 早川操, 松浦良充, 広石英記. 経験の意味世界をひらく-教育にとって経験とは何か-. 東信堂. 2003.

Evaluation of Early Exposure to Clinical Practice in the Graduate Program in Midwifery: Analysis of Students' Learning During Practicum at Midwifery Clinics

Hiromi Nishide¹⁾, Yukiko Nagaoka¹⁾, Chiori Shimada¹⁾

¹⁾Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Graduate Program in Midwifery

Objective: To assess the effect on learning of early exposure to clinical practice by exploring midwifery students' learning from their experiences during practicum at midwifery clinics.

Method: After obtaining consent from eight midwifery students, data were collected from students' practice records. We extracted sentences that describe "learned," "realized," and "felt" from the students' experiences in the practicum and then coded them to analyze data inductively.

Results: Students experienced antenatal care, outpatient lactation care, postnatal care, birth observation, and home visits for newborns. They also accompanied parents to health check-ups for infants and participated in different classes that each midwifery clinic provides. Their learning experiences were categorized into five: understanding patients, skills necessary for midwives, attitude of midwives, role of midwives, and role of midwifery clinics. These five categories were found to be aligned with the learning goals of clinical practice. In addition, students were able to visualize the standard of midwifery that they aim to achieve as well as clarify their own tasks for the next step in their career.

Conclusion: Experiences gained at midwifery clinics through early exposure to clinical practice were effective for introducing students to more advanced nursing studies.

Keywords: early exposure to clinical practice, midwifery clinic, independent midwife, experience